

マイノリティーの叫び

—— スペイン語圏 ——

宇野 和美

先日、近所の児童書店に立ち寄ったとき、「うちは学校図書館にも納入しているけれど、注文される翻訳書のほとんどは93で始まるの。この本に載っているようなほかの番号のものが、もっと増えていいのにな」と店長に声をかけられた。「この本」というのは、私も編集にかかわった『多文化に出会うブックガイド』（読書工房）のこと。考えてみると、NDCが九一〇番台の日本文学や九三〇番台の英米文学以外の児童文学の本は、もともと数がずっと限られているのだろう。

私の専門であるスペイン語は、世界の二十一の国と地域で話されている、世界で四番目に話者の多い言語だが、日本の翻訳出版分野ではマイナーな存在だ。日本では一般にスペイン語圏は遠く、なじみが薄い。私自身が翻訳してきた本を見ると、その半分以上がこちらからの持ち込みにより出版された本だ。これは、出版界においてスペイン語圏の情報が圧倒的に少ないことの反映で、この状況はここ数年

年変わらないようだ。

だから、翻訳をしようと思えば、翻訳者は本探しと企画の持ちこみにはげむことになるのだが、主流ではない文化を導入する難しさをずっと痛感してきた。未知の世界に目を開かれることや、その新しい世界の中に自分との共通項を見いだすことは、本を読むときのおもしろみの一つだが、スペイン語圏の本に関して求められているのは、極端に言うところ「スペインのとかラテンアメリカのとうたえるような、ほどこほどのめずらしさ」だと感じる人が多い。特殊なものは求められるが、舞台背景がやや入り組んでくると敬遠され、全体に関心が薄い。マイノリティーの悲哀である。

たとえば、十五世紀のスペインを舞台に、信仰をこえた友情をうたった『約束の丘』（行路社）という作品を持ちこんだとき、ある出版社で「こんなことを読者は知りたがらないから」と一蹴されたことがある。歴史小説は確かに難しい分野だが、知りたがらないなら、知らせる価値はないのか、と考えるようになった。翻訳文学を見まわしてみると、英語圏の作品ならかなり複雑な歴史や社会事情を背景としている作品もたくさんありそうなのだが、受容されないのはスペイン語圏だからか、それとも実際つまらないことなのか。

だが、日本人にはなじみがない特殊な背景の物語だろうと、そこに生きる人びとの喜びや悲しみ、普遍的な人間の